

論説

バングラデシュの手工芸にみる社会関係

——手織布ジャムダニを事例に——

岡田 菜穂子

はじめに

バングラデシュでは、1971年の独立以降、様々な援助活動が展開されてきた。独立当初は主に救援活動が、その後は最貧国バングラデシュの開発援助のための活動が実施されてきた（佐藤 1998、臼田 1999、向井 2003、大橋 2004 他）。バングラデシュで活動する NGO（Non Governmental Organization）の数は年々増加し、現在ではバングラデシュ内外の NGO がプロジェクトを展開している（下沢 1998、大橋 2004）。

開発援助プロジェクトの中でも、特に有名なものに、マイクロクレジットがある¹。マイクロクレジットは、貧困層に無担保で少額のローンを貸し付けるというもので、多くの NGO が実施するプロジェクトである。マイクロクレジットの場合、返済のためにグループ編成を行うことはあっても、資金を貸し付ける対象は基本的には個人単位である。この点は、バングラデシュを代表する手工芸品ノクシ・カンタ²に関わる活動についても同様である。しかし、支援の対象となる人々の置かれた状況によって、個人単位では活動に関わりにくいケースもあると予想される。例えば、本論で取り上げるジャムダニに関わる人々への支援も、その一つである。

ジャムダニは、バングラデシュを代表する手織り布で、ノクシ・カンタと同じく、バングラデシュの手工芸品として NGO が取り上げる布製品である。ノクシ・カンタと異なるのは、ジャムダニは一枚の布を織りあげるまでに組織化・分業化された生産工程を採るという点である。このことは、主に個人を対象とした開発援助活動が、ジャムダニ生産にどのように関わることができるといえるのかという問題となる。

これまで筆者は、バングラデシュの政府機関や NGO が、ジャムダニの織り手を、貧しい伝統技術の保持者であるとして、支援しようとしていることに着目し、現代バングラデシュにおいてジャムダニ工芸が成り立つ仕組みを、

開発援助との関係から明らかにしようとしてきた。これまでの研究で、バングラデシュの手工芸品として NGO が商品化したノクシ・カンタの生産工程（五十嵐 2000、2002、2004）と比較し、ジャムダニがプッティングアウト・システム³によって製品となるしくみを明らかにした（岡田 2005）。

ノクシ・カンタは、生産から販売までのプロセスを NGO が構築している。五十嵐の示す例では、NGO でノクシ・カンタの材料等をパッケージ化して生産者へ渡し、出来上がった製品を細部まで NGO がチェックするのである（五十嵐 2002）。対して、ジャムダニの場合は、NGO スタッフの生産への関わり方が限られている。ジャムダニ工芸の特徴は、ジャムダニ作りはマハジャンと呼ばれる仲介者たちが要となっていること、そのために NGO や政府機関のスタッフが織り手に直接コンタクトを取ることが難しいことである（岡田 2005）。

これまで筆者が明らかにしてきたのは、主にジャムダニが作られる仕組みに関する研究であった。では、ジャムダニ工芸は、どのような人間関係に支えられて成り立つのであろうか。そして NGO スタッフ等の支援者は、ジャムダニ工芸にどのように関わるのか。本論では、お互いをどのように認識するのかという視点から、開発援助を実施する側とマハジャンの関係を読み直し、マハジャンと機織り人の関係に焦点を当てて、ジャムダニ作りに関わる人々の社会関係を明らかにしたい⁴。

1. ジャムダニ工芸に関わる人々

本論で取り上げるジャムダニは、ベンガル地方を代表する手織り布の一つである。ジャムダニは、薄い平織りの地に、地の糸よりも太い糸で幾何学模様を縫い取り織りした織物で、織り上がった布は、主に女性の衣服であるサリー⁵として着用される。

ジャムダニはインドの西ベンガル州や、バングラデシュのダッカ周辺で生産され、産地や織り方によって、いくつかの種類に分けられる。中でも、バングラデシュを代表する布とされるのは、ダカイ⁶・ジャムダニである。ダッカ近郊のシットロッカ河のほとりで作られるダカイ・ジャムダニは、他のジャムダニの起源とされ、「本物のジャムダニ」と呼ばれる。バングラデシュの

NGO や政府機関の活動で取り上げられるジャムダニも、多くがダカイ・ジャムダニである。本論では、このダカイ・ジャムダニを取り上げる。以下、ジャムダニと表記する場合は、ダカイ・ジャムダニを指すこととする。

ジャムダニは、織りの工程がすべて手作業で行われるのが特徴である。織りには、地面に掘った穴に織機を渡したピットルームが使われる。機織り人は、通常2名が穴の縁に並んで座り、杼(ひ)を一方からもう一方へ投げ込むようにして横糸を通しながら、デザイン用の太い横糸を織り込んでいく。縫い取り織りによって織り上がったジャムダニは、NGO の販売店や、ダッカのサリー店等に並ぶ。ジャムダニは、その多くが高級サリーとして販売されている。サリーは素材やデザインや製法によって値段に幅があり、200タカ⁷程度の綿製サリーから、数千・数万タカの良質のシルク・サリーや細かい刺繍入りのサリー等がある。ジャムダニ・サリーの値段はデザインの多さと質により1,000タカ前後から10,000タカ前後で、中には数万タカのジャムダニ・サリーもある。

ジャムダニづくりに関わるのは、タンティと呼ばれるジャムダニの織り手、カリゴルと呼ばれる織り以外の工程に携わる職人、織り手に材料や設備を提供したり、織りあがったサリーを集めて販売の場へ届けたりする仲介者マハジャンである。本論では、特にタンティとマハジャンを取り上げ、NGO のスタッフとマハジャン、マハジャンとタンティの関係に着目する。

タンティ (*tant*) : 機織り人

タンティとは、織りの工程を担う人々のことである。*tant*とは、機織り機で、*tant*は機織り機の人となる。タンティは、ジャムダニに限らず、特にサリー等の衣服を織機で織る者に対して使われる語である。

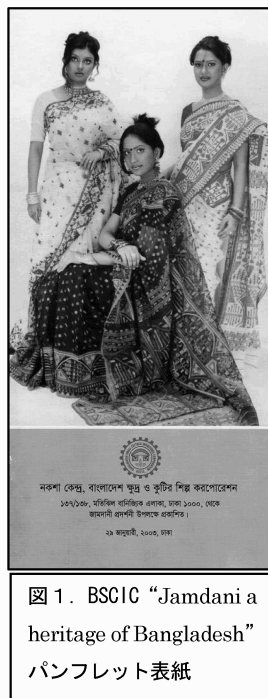


図 1. BSCIC “Jamdani a heritage of Bangladesh”
パンフレット表紙

本論では、ジャムダニの織りの工程を担当する者を指す語として使う⁸。機織り工房で働くタンティは常に決まったメンバーとは限らず、機織りを辞めて他の仕事に就いたり、他の仕事を辞めて機織りを再開したりしている。

マハジャン (*mahajan*) : 仲介者

マハジャンとは高利貸しや仲介者を指す語である。大抵の場合、ひとりのマハジャンが扱う品物は限られており、ジャムダニのマハジャンは、ジャムダニのみを扱う場合が多い。筆者が調査中に会ったジャムダニのマハジャンは、ジャムダニの仲介業を担う者たちで、タンティが織ったジャムダニをダッカのサリー店や NGO の担当部署へ持参し、次の注文を受け、タンティに注文に沿った内容を指示する。

ジャムダニを扱うマハジャンには、かつてタンティとしてジャムダニを織っていた経験を持つ者が多く居る。

NGO のスタッフ

政府機関 BSCIC (Bangladesh Small and Cottage Industries Corporation) や、複数の NGO は、ジャムダニに関わる活動を展開している。首都ダッカのギャラリーでは、いくつかの NGO が共催する展示会が開催されたり、NGO の手工芸品販売店では、ジャムダニ・サリーの販売コーナーが設けられたりしている。ジャムダニを扱う NGO の多くは、タンティから直接製品を買い取ろうとしている。NGO の担当部署では担当のスタッフが、持参された製品を受け取ったり、注文を出したりしている。NGO スタッフとマハジャンは、発注者と受注者の関係にある。

2. ジャムダニをめぐるマハジャンと NGO の関係

NGO 販売店で販売されるジャムダニは、マハジャンの手によって集められ NGO の担当スタッフまで届けられる。その際に、マハジャンと NGO のスタッフとの間では、卸値や、色やデザインの決定が行われる。では、ジャムダニをめぐる値段やデザイン等についてのやり取りの中で、マハジャンと NGO スタッフは、お互いをどのように評価・認識しているのであろうか。

(1) NGO にとってのマハジャン

NGO のスタッフにとって、マハジャンとはどのような存在なのであろうか。本論では、事例としてジャムダニをつくる村落の一つK村に住むマハジャン、シャミン（30歳、男性）の取引先の一人である、ある NGO スタッフの例を見てみる。以下に示す事例は、シャミンと NGO スタッフのやり取り、NGO スタッフから筆者への質問、シャミンと筆者の会話である。

事例 1-1. タンティかマハジャンか

シャミンと二人で、ある NGO のオフィスへ訪れた時のことである。オフィス入り口の待合室で、取引のある者が、担当者から呼ばれるまで待っている。その日、待合室には数名の男性が待機しており、その中には知人のマハジャンもいた。

シャミンと筆者に担当者から声がかかり、別室へ通された。シャミンと担当者との打ち合わせが終わったころ、筆者は担当者から、待合室で待つ男性たちについて、彼らはタンティなのかと質問を受けた。

この NGO では、他の NGO と同様、タンティを支援するため、タンティからジャムダニを買い販売する活動を行っていると聞いていた。待合室で待つ男性たちが、タンティであるかマハジャンであるかは、この NGO と男性たちが、今後取引を続けていくかどうかにも関係する、重要なポイントであると予測された。

マハジャンたちが、NGO 関係者に自分の立場をどのように説明しているのかは明確ではない。シャミンは、筆者の知人に自己紹介をする時には、ベブシャ（商売）をしていることを強調する。しかし、NGO の関係者に同様の自己紹介をしているとは考えがたい。マハジャンたちの多くは、NGO のプロジェクトの様子を見聞きする機会が多いからである。

NGO のジャムダニに関する活動は、タンティを対象としたものとしているものの、NGO のスタッフが、ジャムダニを織るよう注文したり出来上がったサリーを受け取ったりする相手はマハジャンである（岡田 2005）。NGO のスタッフは筆者に「彼らはタンティか？」と聞いたように、自分たちが取引し

ている相手がタンティであるかどうかについて、確信を持たずにいる様子である。NGO のスタッフたちは、なぜ相手がタンティであるかどうか判断できずにいるのか。また、相手がタンティかどうか分からないままに、ジャムダニを注文し、製品を受け取り、代金を支払うという関係を続けるのはなぜだろうか。

事例 1・2. タンティかマハジャンか

別の日のことである。この日は、同じ NGO の手工芸部門の代表者に、ジャムダニに関する活動の詳細についてインタビューするため、筆者だけで事務所を訪れた。

代表者から、この NGO が行うジャムダニに関する主な活動は、タンティからジャムダニを買い取り販売すること、ジャムダニの市場を開拓することであるとの説明を受け、続いて具体的にどのように活動を進めているのかを聞いた。

初めに仕事を与えたのは、ある 2 人の人物であった。当初は、彼らに、機織り機の設置代を援助した。その機織り機でジャムダニを織るよう指示し、サリーを織らせた。ジャムダニ・サリーのデザインについては、博物館に収蔵されているサリーからデザインをリメイクした。この NGO が扱うジャムダニ・サリーのデザインのコンセプトは、古いデザインを組み合わせる新しいデザインを作ることであった。

援助するのはマハジャンではなく、タンティであるはずであった。しかし、援助を始めたタンティたちは、自分たちの思うようにはならなかった。はじめに仕事を与えた二人のうち一人には、この NGO 以外の NGO や BSCIC が支援し、彼は有名な「タンティ」になった。この NGO の代表者は、自分たちが取引している者の中には、ほかにも、以前はタンティであったが、今では機織りを離れてマハジャンとして活動している者もいると予想していた。

NGO 関係者にとって支援活動を行う上で重要なのは、自分たちの注文を受ける相手がタンティかどうかということである。NGO の手工芸部門の代

表者が指摘するように、自分たちがジャムダニを巡るやりとりをしているのは、タンティではなくマハジャンなのではないかという予測がある。

NGO のスタッフにとっては、直接ジャムダニの注文を出す相手がタンティであるかマハジャンかの区別をすることが難しい。先に挙げた事例から、その理由の一つは、目の前の相手が、ジャムダニに関わるプロジェクトを始めた当初はタンティであったものの、次第にタンティからマハジャンへと、ジャムダニに関わる立場を変えていたということが挙げられる。

NGO スタッフにとって、取引相手がタンティかマハジャンかを区別することを難しくさせているもう一つの理由は、NGO スタッフの計画と現実とのギャップである。NGO の関係者がジャムダニをタンティから買い取ろうと計画しても、直接接触できるのは、実際にはマハジャンである。

ジャムダニの生産と流通は、マハジャンを中心に成り立っている。流通に関しては、マハジャンが出来上がったサリーを、販売を担う者へ売り込み、同時に注文を取りつけている。NGO のプロジェクトは、販売を行うことでジャムダニの市場を広げ、注文を出すことでタンティの就労環境を改善しようという企画である。NGO スタッフがプロジェクトの対象となる人物と接触を持とうとした場合、それはジャムダニの流通を担うマハジャンに限定されてしまうことになる。

ジャムダニに関わるプロジェクトを展開する NGO の多くが、プロジェクトの目的の一つを、貧しい機織り人の支援としている⁹。マハジャンであれば、タンティよりも収入が多く、ジャムダニを織るための資金調達も比較的容易であると考えられるため、マハジャンは支援の対象として適当とは言えない。相手がタンティであればジャムダニの注文を出す相手として適当であるが、マハジャンであれば不適当であるということになる。取引してきた相手が、支援の対象として妥当であるかどうか疑問が残っても、NGO スタッフがこれまで続いた関係を断ち切らずにいるのは、目の前の相手からジャムダニを買い取ることが現実的な方法であることと、そうすることで、支援の対象を確保できるという側面もあると考えられる。

事例2. シッキトとオシッキト

筆者は調査中、何度か、タンティやマハジャンのことをオシッキト（教育を受けていない人）と話す場面に居合わせた。

ダッカで開催されたジャムダニ織りのデモンストレーション会場での来客どうしの会話で、NGO のオフィスを訪問した際にスタッフから話の中で、筆者がジャムダニに関わる人々の調査を行っていることが知られた。バングラデシュの知人との会話で、ジャムダニのタンティやマハジャンは、「あの人たちはオシッキト（教育を受けていない人）だ。」と表現されるのである。ジャムダニのタンティの教育程度が低い理由は、一日中機織りばかりしているためだとされる。

マハジャンは、オシッキトのほかにチャラク（ずるがしこい）と形容されることがある。ある NGO の代表者が筆者に対して、マハジャンの性質について、マハジャンはチャラクであると説明したことがあった。NGO のスタッフとの関係において、タンティは伝統技術の保持者として賞賛の対象になり得るかもしれないが、マハジャンはその商才を評価されることは少なく、むしろそれが負のイメージとして語られる。

ジャムダニ織りの展示会やデモンストレーションの会場に訪れるのは、伝統工芸や NGO の活動に意識が高く、会場の英語の説明書きを読む程度に教育を受けた者が多い。NGO のスタッフは、今やバングラデシュにおける人気の職種の一つで、ポジションによっては、かなりの高学歴を期待される。彼らは、シッカ（教育）の程度を基準に会話を展開する場合も多い。そのなかで、彼らはタンティやマハジャンをオシッキトであると話す。彼らの発言から読み取れるのは、ジャムダニのマハジャンやタンティをオシッキトとすることで、シッキト（教育を受けた人）である自分たちとマハジャンやタンティとを、明確に区別しているということである。

調査期間中、筆者は、調査地の人々から「結婚しているか」「父親は何をしているか」「何年生まで勉強したか」という質問を受けることがあった。これらは、筆者が何者であるかを認識するために投げかけられた質問で、バングラデシュ人同士の間でも頻繁に見られるやり取りであった。「何年生まで勉強したか」という質問は、相手の教育のレベルと、教育を受けるだけの環境

に恵まれているかどうかを図るための基準となっている。

バングラデシュの識字率は、上昇していると言われるものの、2008年時点で約52%¹⁰という統計もあり、読み書きが難しい人口はまだ多いのが現状である。筆者が調査を行ったK村においても、学校に数年通った経験のある者は読み書きできるが、そうでない人々の中には、読み書きや計算が難しい人も多い。K村には、学校に行かずに、毎日ジャムダニを織る子どもや、子どものころから働いてきたために教育を受ける機会に恵まれなかった成人が少なからずいる。その一方で、経済的に余裕のある者は、地方を出てダッカの教育機関でより良い教育を受けようしたり、国外の高等教育機関を目指して受験勉強に励んだりするなど、教育熱が高いのも事実である。

マハジャンやタンティの中には、教育程度を克服することで、ジャムダニ業からの脱出を図る者もいる。彼らは、より経済的に豊かで社会的地位の高い人物をボロ・ロク（大きい人）と表現し、より多くの人からボロ（大きい）であると認識されようとする。例えば、K村のマハジャンの一人であるラフマンは、自分の息子に教育を受けさせるため、ダッカの学校へ通わせようと計画していた。シャミンの母は、シャミンがもっと教育を受けられればマハジャン以外の職につけたと考えている。特にマハジャンはタンティに比べて、村落から都市部へ出て、NGO スタッフや高級住宅地にあるサリー店の店主等とやり取りをする分、自己と他者との上下関係を意識する機会も多いはずである。

これらの例より、NGO 関係者が、マハジャンを自分たちより下位に位置づけていると同時に、マハジャンはNGO スタッフを自分より上位に位置づけていることが明らかである。マハジャンとNGOのスタッフは、マハジャンに比べてNGOスタッフが上位にあるという認識を共有している。NGOスタッフとマハジャンは、ジャムダニを扱うパートナーとしてだけではなく、上位のNGOスタッフと下位のマハジャンという位置づけを含めた関係にある。

(2) マハジャンにとってのNGO

では、マハジャンにとってのNGOあるいはNGOのスタッフとは、どの

ような存在なのであろうか。マハジャンにとって NGO のスタッフは自分たちよりも社会的に上位にある存在であると認識されていることを述べた。では、自分たちよりも社会的上位にある NGO のスタッフと、ジャムダニの流通等を通じて交流があることは、マハジャンにとってどのような意味を持つのであろうか。

事例 3. NGO とは何か？

筆者の調査も終盤を迎えようとしていたある日のこと、シャミンから筆者へ「NGO とは何か」という質問があった。

シャミンは、NGO という言葉は知っていたし、自分がジャムダニを届ける先の中に NGO と呼ばれるものが含まれていることは知っていた。しかし、NGO は一体何を目的として、何を行っている機関なのかについては、良く知らないのであった。

NGO とは何かという質問に見られるように、シャミンは、NGO がジャムダニの市場を広げようと試みたり、タンティの支援を行おうとしたりしていることを良く知らないでいる。シャミンにとって NGO で働くスタッフは、自分よりも社会的に高い立場にあることを先に述べた。また、NGO は、ジャムダニの卸し先として、サリー店等と比べて卸値が多少高く、また確実に代金を支払ってくれるという点で、良きビジネス・パートナーとなっている。

シャミンを含む K 村 A 工房で働く人々は、NGO が具体的にどのような活動を行っているのか詳しく知らないながら、何か自分たちの都合の良いことを考慮してくれるという期待は持っているようである。例えば、困った際に援助してくれるのではないか、何か自分たちのために配慮してくれるのではないか、交流があればビジネスチャンスに繋がるのではないか等といったことである。次に見るのは、開発援助活動に対する期待についての事例である。

事例 4 開発援助活動に参加する理由

政府機関 BSCIC のジャムダニプロジェクトは、ジャムダニ産業の

発展とジャムダニの保存のために、産業地域を整備し、機織り工房を建設するための400程度の区画を希望者に販売するという計画である。

K村のマハジャンであるラフマンは、プロジェクトの区画購入を希望していた。ラフマンは、海外から地位の高い人々がジャムダニプロジェクト・エリアの見学にやってくることを予測し、そこで伝手ができることを期待して一区画がほしいと言う。

ラフマンは、プロジェクト・エリアのショースペースとしての役割に着目している。ジャムダニを織っている様子を見学するには、ダッカの展示会等でのデモンストレーションを見るか、旅行会社が企画するジャムダニ村での機織り工房を見て回るツアーに参加する方法が主である。BSCICのジャムダニプロジェクト・エリアが整備されれば、機織りを見学しに、外国人や社会的地位の高いバングラデシュ人がやってくる。ラフマンにとっては、BSCICの担当スタッフとだけではなく、国内外からの来訪者と知り合いになり、商売をするための伝手を得る可能性が高くなる。ラフマンは、マハジャンとしての自分の商売につながる可能性があると見込んで、プロジェクト・エリアの区画獲得のために投資しようとしている。

事例5 NGOへの期待

ジャムダニをテーマにした写真集に掲載する写真撮影のため、あるNGOの代表とカメラマンがK村を訪れた。彼らは、ジャムダニの工房や女性たちが糸を巻いている様子等を見学し、機織りに使う道具を撮影した。

K村滞在中に、NGOの代表は、まだ幼い子どもがジャムダニを織る姿を見かねて、工房の近くに教育を受けられる場を設けるべきと言い、学校をつくるという提案をした。代表から場所の提供ができるかを尋ねられたマハジャンのラフマンが快諾し、この計画は、筆者が調査を終えて帰国した後に実現した。

自分にシュビダ（都合の良いこと）が起きるのではないかという期待を寄せながら交流するということは、マハジャンと NGO スタッフの間柄においてだけでなく、知人や親族、商売仲間の関係においても、良く見られることである。具体的に実現するのには予測がつかないことも多いが、何か良いことをもたらしてくれるのではないかという期待から関係を保とうとする。事例で紹介した NGO の代表の提案は、K 村の人々の期待が実現したケースの一つである。

都合の良いことを提供してくれそうな人物の周囲には、シュビダを期待する人々が集まる。相手に期待を持たせるのは、交流の手法のひとつである。この手法が最も効果を発揮するのは、シュビダの期待をする者と比べて、期待される側が経済的に裕福であったり、より社会的に高い立場にいたりする場合である。自分と相手の間の格差を意識するからこそ、自分では手の届かない部分を、目上の誰かに期待することになる。

原は、バングラデシュ東部のチッタゴンの人々が「ステータス」を求める現象について、イスラム平等主義から説明しようとした。原は、平等であるからこそ、一度築いた上下関係はいつでも逆転しうるため、上位に立つ者は自分の地位を再確認するために、常に上位であるということを示そうとする（原 1969、HARA1991）。原の議論は、論拠をイスラムに求めすぎているという指摘を受けながらも、今なお注目されている（外川 1999、高田 2006）。イスラム平等主義がどこまで適応可能なのかを再考する必要があるとして、相手にシュビダの期待を持たせる行為は、相手よりも自己が上位にあることを確認する行為として理解できるのである。

マハジャンと NGO スタッフの互いの認識の仕方からは、相手についての情報が限られているなかで、相手を自分より上位にあるか下位にあるのかを位置づけながら、相手に期待したり頼ったりしていることが分かる。マハジャンよりも NGO スタッフが社会的に上位にあるという認識を共有しながら両者が交流するのは、ジャムダニを作り売るという過程にはマハジャンも NGO スタッフも必要な要員であることがある。更にここで明らかとなったのは、NGO スタッフにとってマハジャンとの交流は、開発援助活動の対象者と唯一繋がる方法であり、逆にマハジャンにとっては交流すること自体が

自分に利益をもたらす可能性をもっているということである。ここに、ジャムダニをめぐるマハジャンと NGO の相互依存の関係が見て取れる。

3. A 工房を中心としたマハジャンとタンティの関係

K 村は、ナラヤンゴンジ県 ショナルガオン市、ジャムダニ産業が盛んなダッカ近郊の地域に位置する、人口約 1000 人のイスラム教徒が住む集落である。2004 年当時、K 村には数名のマハジャンがおり、タンティとほかの職人たち 100 名程度がジャムダニ作りに従事していた。A 工房は、K 村の中でも規模の大きな工房の一つで、マハジャンのひとりシャミンが運営する工房である。

本節では、A 工房の様子から、マハジャンとタンティの多様な関係をみていきたい。



図 2. ナラヤンゴンジ県地図

(1) A 工房の様子

A 工房はシャミンの住むバリ（屋敷地）の一角にある。バリには、中庭を囲むようにゴル（家屋）と工房が建てられている。工房では、機織り機が設置できるように、土の床に 6 か所の穴が掘られている。全ての穴に機織り機が設置されているとは限らず、たいていは、1 つの穴を休ませて 5 機を設置している。バリには A 工房の他に、ゴル II の軒先に、機織り機が設置されて

いる（図3参照）。

A 工房で働くタンティの人数やメンバーは固定されてはおらず、10名前後のタンティが入れ替わりながら働いている。表1では、5名のタンティが恒常的に織り、日によってほかのメンバーが加わっている。工房で働くタンティの特徴として、主に男性であること、年齢層は主に10代前半から20代前半であることが挙げられる。

工房で働くのは、シャミンの兄弟、親族の他、近隣に住む知人たちである。工房では、サリーを織る場合は、マスターが機織り機に向かって右、アシスタントが左に座り、2人で一枚のサリーを織る。スカーフ等、幅の狭い生地を織る場合は、1つの機織り機に1人が座って織ることもある。

A 工房では、金曜日と祝日を除いて、毎日朝7時ごろから日暮れまで作業が行われる。13時頃には、適宜休憩をとり、たいていの場合、タンティは各自いったん自宅にもどって食事をとる。みな、一時間程度で工房に戻り、再び作業を始める。

シャミンは、ダッカにサリーを届けに行ったり、バザールに糸を調達しに行ったりして、不在のことも多い。シャミンが不在かどうかに関わらず、タンティ達は毎朝工房へ出勤しては、適宜作業を進めている。シャミンは在宅時には、工房のタンティたちに声をかけて指示を出したり、作業の進み具合を確認したりしている。工房内では、職人達が作業の合間に時々休憩をとり、タバコをくゆらせたり、職人とシャミン、職人どうしで冗談を言い合ったりする事もしばしばである。

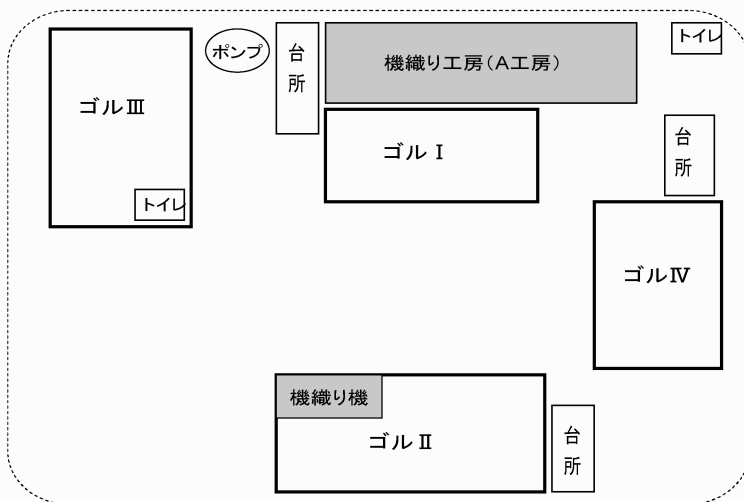


図3. A工場の立地

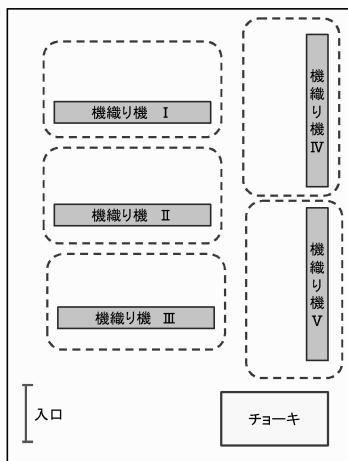


図5. A工房内の様子

図4. A工房内 略図

表 1 : A工房で働くタンティの例 (2003年)

					10/13	10/19	11/17	12/6
					7名	8名	10名	8名
*	タンティ A	20歳前後	男性	未婚	○	○	○	○
	タンティ B	17歳前後	女性	未婚	○	○	○	○
*	タンティ C	25歳前後	男性		○	○	○	○
*	タンティ D	25歳前後	男性		○	○	○	○
	タンティ E	15歳前後	男性	未婚	○	○	○	○
*	タンティ F	25歳前後	男性	既婚	○	○		
	タンティ G	12歳前後	女性	未婚	○	○		○
*	タンティ H	21歳前後	男性	既婚		○	○	
	タンティ I	28歳前後	男性	既婚			○	○
	タンティ J	23歳前後	男性	未婚			○	
*	タンティ K	23歳前後	男性	未婚			○	○
	タンティ L	23歳前後	男性				○	

* : マスター(機織り機に向かって右に座る)

表 2 : サリー店への卸し値 (2003年10月17日)

品目	卸し値(tk)
ジャムダニ・サリー	4,000
	5,500
	3,000
	2,000
	2,000
ジャムダニのスカート	1,000
	1,000
合計	18,500

金曜日は、機織り工房での作業は休みで、週に一度、マハジャンからタンティへモジュリ（賃金）を渡す日でもある。表2は、シャミンがダッカのサリー店に製品を卸した記録である。シャミンはこうして得た売上金の中から、表3のとおりタンティへ賃金を渡す。シャミンから賃金を受け取るのは、A工房で働くタンティと、K村や隣村でジャムダニを織るタンティである。全員が、シャミンがダッカのサリー店やNGO等から取り付けた注文を、シャミンの指示を受けて織っている。誰がどのサリーを織るのかは、シャミンが割り振る。

シャミンからタンティへ渡す賃金は、一週間の作業時間、マスターかアシスタントか、工房主かどうか等によって、100～1,000タカと開きがある。通常、週6日ジャムダニを織れば、マスターは500タカ、アシスタントは250タカの賃金である¹¹。

表2と表3から、シャミンは、サリーを売ったその日の売り上げの中から、賃金を工面している様子が見える。調査中、時折見られたのは、ひとり別部屋で、納期にサリーを織りあげる予定を確認し、売上予定を計算したりして、タンティへの賃金をきちんと支払える目途を立てているシャミンの姿である。工房で職人達が機織り作業に従事している間、シャミンはダッカへ通い、織り上がったサリーを売り、売上金を手に入れるという作業に追われていた。シャミンによると、織り上がったサリーをダッカのサリー店へ届けなくても、サリーの代金を支払ってもらえないこともしばしばあるという。このような場合は、他にサリーを卸している二つのNGOからの売り上げから、タンティたちへ賃金を払う。売上金を確保できるかどうか、取引相手との交渉がうまくいくのか、マハジャンは、タンティと取引先との間に立ち、ブレッシャーにさらされる役割であるとも言える。

表3：シャミンから支払われる賃金（2003年10月17日）

	タンティ	賃金	機織りの場	
1	タンティA	500	A工房	●
2	タンティB	200	A工房	●
3	タンティC	500	A工房	●
4	タンティD	500	A工房	●
5	タンティE	250	A工房	●
6	タンティF	250	A工房	●
7	タンティG	100	A工房	●
8	タンティH	200	A工房	●
9	タンティM	1,000	C村・自宅	
10	タンティN	1,000	C村・自宅	
11	タンティO	1,000	N村・C工房	
12	タンティP	1,000		●
13	タンティQ	1,000	N村・C工房	
14	タンティR	1,000	KO村	●
15	タンティS	500	K村・B工房	*
16	タンティT	500	C村	
17	タンティU	500		?
18	タンティV	500		?
19	タンティW	500		?
20	タンティX	500		?
21	タンティY	500		?
	合計	12,000		

*：マリック(工房主)

●本人に1人分の賃金が渡されたケース

自宅：自宅の軒先に設置された機織り機

(2) K村におけるマハジャンの位置づけ

K村では、マハジャンは、他の村人に比べて経済力があり、社会的な立場のある者と見なされている。K村に住むマハジャンは数名で、うち自らダツカの注文主と取引を行うのは、ラフマン(39歳、男性)とシャミンである¹²。彼らは、K村では珍しいコンクリートづくりの家に住んでいる。ラフマンは、村落単位の行政組織グラム・ショルカリ(村政府)¹³のメンバーで、村人間のトラブルの仲裁に入ることもある。

では、K村の人々は、マハジャンをどのように表現するのであろうか。あるタンティの例を見てみたい。

事例6.

村の工房のなかに、シャミンの父方親族が運営する工房がある。この工房では、シャミンの親族にあたる男性たちが機織りをしている。彼らのうちの一人は、以前政府のジュート・ミルで勤務していた経験がある。彼がどのような経緯で、工場勤務を辞め、ジャムダニを織るようになったのか聞き取りを行っていた時のことである。

その理由を、毎朝、遠い工場まで通勤することや、人に命令されながら働くことに嫌気がさして、自分の家にある機織り機で再びジャムダニを織り始めたと説明し、今からジュート・ミルに戻る気は無いが、機織りだけでは家計が苦しく、金が欲しい。やはり金は必要だ。マハジャンは良い。金があるから、と続けた。

事例6のタンティは、4人兄弟の次男で、兄弟全員がジャムダニを織っている。彼の父も祖父も、ジャムダニを織るタンティであった。彼は、小さいころジャムダニ織りを習ったため、機織りの技術は身につけていた。そのため、機織りに復帰した時もすぐに勘を取り戻す事ができた。今は、兄弟全員と、同じK村に住む職人たちと一緒に、バリ(屋敷地)内にある、6機の織機を備える工房でジャムダニを織っている。

この事例のように、マハジャンは、タンティをはじめとする他の村民よりも、経済的に裕福であり、自分よりもより良い立場にあるとする説明は多く

聞かれる。より豊かであるという認識から、マハジャンは羨望だけでなく、嫉妬や批判的となることもある。マハジャンやその家族は、自分たちへ向けられるまなざしがどのようなものかを理解し、時に自分たちが嫉妬や批判的になり得ることも考慮して、適宜、対応を迫られる。K村では、タンティよりマハジャンが社会的上位にあるという認識が、タンティとマハジャンで共有されている。

(3) ジャムダニがつくるタンティとマハジャンの関係

K村のマハジャンであるシャミンとタンティは、兄弟や親族、以前からの知人の関係にあることが多い。それが、織りの指示を出し、その指示をうけてジャムダニを織りあげるという行為を通して、マハジャンとタンティの関係として改めて結び付けられるのである。

そこで、次に、機織りを始めるきっかけから、タンティとマハジャンの関係を検討したい。K村の人々が機織りを始めるのは、多くが経済的な理由からである。工房でジャムダニを織るタンティの多くは男性であり、彼らは自分の家族を支えるために、工房に出勤して機織りをする。女性や子どもが機織りをする場合は、その家庭の経済状況が思わしくないことが多い。

事例7. タンティ G の例

当時、タンティ G (12歳、女性：表1・表3対応) は、A工房でアシスタントとして機織りを習い始めたばかりである。

A工房では、タンティ G のキョウダイが働いている。長男タンティ L、二男タンティ H、長女タンティ B である。シャミンの工房で働く職人は、タンティ G とタンティ B の姉妹を除いて、全員が男性である。

シャミンによると、タンティ G とキョウダイたちが A 工房で働き始めたのは、タンティ G の母から相談を受けたことがきっかけとなっている。タンティ G の家族は K 村のシャミンのバリの近所に住んでおり、それぞれの家族は、以前からの知り合いである。

ある日、シャミンは、タンティ G の母親から子どもを働かせてほ

しいという申し出を受け、引き受けることにした。タンティ G のキョウダイのうちの一人が働き始めた。しばらくしてタンティ G の母は、もう一人を働かせてほしいと申し出た。それが続いて、兄弟姉妹 4 人がシャミンの工房で働くことになった。タンティ G は、キョウダイの中でも最後に A 工房で働き始めた。

タンティ G の家庭は、様々な要因が重なって、経済的に逼迫した状況にあった。家族が食べるためにも、タンティ G の母は子どもたちを働かせるしかなかった。子どもを働かせざるを得ない状況にあったとして、子どもを安心して働かせる場を見つけるのは容易なことではない。すぐに現金を得られる仕事が少ない村落部であれば、なおさらである。タンティ G の母は、シャミンとの関係—以前からの知り合いであること、近所に住んでおり職場となる工房は自分の目が届く範囲にあること、そして何より子どもを任せられる程度に信頼できること—の中で、A 工房で子どもを働かせてもらえるよう、依頼したのであった。

シャミンは、こうしてタンティ G たちキョウダイの面倒を見ることとなった。タンティ G は幼く機織りも始めたばかりで、即戦力にはならない。それでもシャミンがタンティ G を雇ったのは、タンティ G もタンティ G の母も以前からの知人であることと、タンティ G を工房へ迎え入れるころには、既に彼女のキョウダイが働いていたという理由からである。シャミンから見れば、雇うのであれば素性のわかっている者を雇いたいという理由がある。実際に、タンティ G の例だけではなく、キョウダイが同じ工房で機織りを行うということは良く見られることである。キョウダイ関係にある者であれば、男性ばかりの工房の中で兄が妹の面倒を見ることもできるため、マハジャンにとっては、工房の管理上も都合が良いという理由もあると考えられる。

事例 8. シャミンとタンティ G の家族

筆者が調査を終えて、バングラデシュからの帰国を控えていたある日のこと、シャミンから、タンティ G の父の病気が悪化したという知らせを聞いた。次にダッカから K 村に戻ってくると、シャミン

は留守であった。シャミンの母に聞くと、シャミンはタンティ G の兄であるイクバルと二人で、ジャマルプールに出かけていると言う。タンティ G の父の病状を親族に伝えるためである。K 村からジャマルプールまでは、バスを乗り継いで数時間、日帰りは難しい距離である。シャミンが K 村に帰ってきたのは数日後であった。

この事例からも、タンティ G の家族にとってシャミンは、家族を雇うマハジャンであるだけでなく、家族ぐるみで頼りにできる存在であることが分かる。シャミンも、マハジャンとしての仕事を休み、ジャマルプールへと向かってタンティ G の家族に協力している。シャミンとタンティ G の家族は、マハジャンとタンティの関係であり、知人である。そしてシャミンはタンティ G の家族の保護者的役割をも果たしている。

事例 9. タンティ Z の例

タンティ Z (35 歳前後、女性) は、K 村のタンティ G の住むバリ (屋敷地) と隣り合ったバリに住み、家屋の軒先に置かれた機織り機でジャムダニを織っている。彼女は、二人姉妹二人兄弟の長女で、妹か兄 (次男) と一緒に機織り機に向かう。彼女はたいていマハジャンであるラフマンからの指示でジャムダニを織っており、織りあがったサリーをラフマンに渡すと同時に、彼から賃金をもらっている。

タンティ Z によると、彼女は結婚し他村で生活していたが、夫は自分を婚家から追い払い、新しい妻を迎えた。K 村の実家に戻った彼女は、一人息子を食べさせるためにジャムダニを織りはじめた。兄がジャムダニの職人だったので、織り方を教えてもらった。彼女の父はすでに亡くなっており、母を食べさせるためにも、ジャムダニを織らねばならなかった。

タンティ Z は、家庭の中で、働き手が必要であったことから、自ら機織りを始めた。自宅に機織り機があったこと、兄からジャムダニ織りを習うこと

ができたこと、マハジャンであるラフマンから仕事をもらえたこと等、タンティ Z には、自宅で機織りを始めるための条件が揃っていた。自宅で機織りの作業ができるということは、バリの外に出なくとも仕事ができることである。これらは、タンティ Z にとって、ポルダ¹⁴を守り、周囲からの非難を避け得るという点で、利点となると予測される。

事例 7 のタンティ G と、事例 9 のタンティ Z は、仮に親や夫の稼ぎがあれば、収入を得るために働く必要はなかったかもしれない。実際に、タンティ G がジャムダニを織っている間に、歳の近いラフマンの息子や娘は学校へと通い、タンティ Z が機織り機に向かう一方で、同じ成人女性であるシャミンの妻や母は、機織りに使う糸の準備を手伝うことはあっても自らがジャムダニを織ることはない。

タンティ G とその家族や、タンティ Z にとって、ジャムダニ織りは、現金収入を得る手段として大きな意味を持っている。K 村内にはすぐに現金を得ることのできる仕事は少なく、子どもや女性が働こうとしても、働くことのできる場は限られているからである。その点、確実に収入が見込め、安心して作業できる場として、知人やキョウダイが働くジャムダニの機織り工房や、自分が住むバリは適当である。

機織りのためには、機織り機等の設備、機織りの技術、材料等が必要であるが、工房には設備や人材がそろっており、経験のない者でも、身一つで見習いとして働き始めることができる。タンティ G の母親にとって、マハジャンであり工房主であるシャミンに頼るということは、娘が機織りを始めるにあたって自分が出資する必要はないという点でも、現実的な選択なのである。

結語

本論では、ジャムダニづくりに関わる、NGO スタッフと仲介者マハジャン、マハジャンと織り手タンティという役割に着目し、それぞれの役割を担う者が、互いに相手をどう認識しているのかについて説明してきた。

K 村では、マハジャンは村落と注文主の住むダッカとを行き来しながら、ジャムダニを運んだり、注文を受けたりしている。注文主である NGO スタッフとマハジャン、シャミンとのやり取りからは、マハジャンに対して NGO

スタッフが上位にあるという認識を共有しながら、ジャムダニを作り売るために互いを必要としているということが明らかとなった。

NGO のスタッフにとって、取引相手がマハジャンかタンティか不確かであったとしても、NGO スタッフが自ら村落へ出向き、マハジャンにとって代わって材料の調達から織りまでの工程を管理するのは難しい。NGO がジャムダニの販売を手掛けるためには、NGO スタッフとマハジャンとが関わる以外に方法はないのである。一方、マハジャンにとって NGO は、自分たちのために何かしらの配慮をしてくれるかもしれないという点で、他の注文主とは一線を画す存在であった。

K 村では、タンティとマハジャンの関係について、タンティに対してマハジャンが上位にあるという認識がある。タンティがマハジャンのもとで働き始めるきっかけを見てみると、マハジャンはタンティが働きやすい環境を提供しており、その点でタンティはマハジャンを頼っていることが分かる。注目しておきたいのが、シャミンがタンティやその家族の面倒を見るというように、マハジャンとタンティの関係は、ジャムダニ工房という場に限られないという点である。K 村のマハジャンであるシャミンは、ジャムダニを織るという作業の枠を超えて、近隣に住む家族の保護者的な存在となっている。

ジャムダニをめぐる NGO スタッフ、マハジャン、タンティの関係の特徴として、互いの上下関係についての認識を共有しながら、互いの存在を必要としているということが言える。NGO スタッフとマハジャン、マハジャンとタンティが、互いを必要とする背景の一つは、ジャムダニは、専門化・分業化されたプティングアウト・システムによって作られるもので、各工程に関わる人物に限られるというしくみである。

K 村では、材料の調達、機織り機等の設備の準備、綜縞通し、織りというように、ジャムダニを作る作業工程が専門化・分業化されている。全ての工程を知り、作業の指示を出すのは仲介者マハジャンである。ジャムダニを織りあげる技術と労力を提供するタンティは、マハジャンにとっては欠かせない人材である。タンティにとってマハジャンは、機織りの仕事と機織りのための環境を与えてくれる重要な人物である。NGO のスタッフは、タンティと直接接する機会が少なく、ジャムダニ生産のための作業工程をつなぐ術を

持たないため、ジャムダニ製品を手に入れるためにマハジャンに頼ることになる。マハジャンは、より安定した製品の買い取り手として、NGO との取引を重視している。

ジャムダニに関わる人々が互いを必要とするもう一つの理由は、上記で説明したしくみによって結び付けられた人々が、互いに期待しあったり、頼りあったりしながら繋がっているということである。タンティの中には、ジャムダニづくりとは異なるところでマハジャンに頼るケースがあることは先に述べた。マハジャンであるシャミンは、タンティの家族の面倒を見る保護者的な立場でもある。このことは、ジャムダニ作りにおいて、NGO スタッフがマハジャンに取って代わることが難しい理由の一つになっている。マハジャンは NGO スタッフに、漠然とした期待をもって取引を続けていた。マハジャンにとって NGO スタッフとの付き合いがあることは、その後のビジネスチャンスにつながる可能性を含んでいる。

これらの繋がりは、NGO の活動内容に関わらず、マハジャンが NGO との付き合いを重視するように、目的を共有していない場合でも成立している。これは、互いの目的が異なっても利害が一致するためである。つまり、ジャムダニづくりに関わる人々の思いは立場によって様々であるが、タンティ、マハジャン、NGO は、ジャムダニを作り売り、そのことによって生まれる利益のために、繋がらざるを得ないのである。ジャムダニ工芸は、NGO スタッフとマハジャンの相互依存関係と、マハジャンとタンティの相互依存関係とが組み合わさることで、成り立っていると結論付けられる。

本論では、ジャムダニ工芸に関わる人々が、それぞれの役割を担いながら互いにどう認識し合っているのかに着目して、布づくりに関わる人々の社会関係を示そうとしてきた。本論で取り上げたのは、K 村のある工房を中心とした事例に限られている。今後は、K 村の事例をより広い文脈に位置付けながら、バングラデシュにおける個人の位置づけや開発援助活動の在り方の議論に繋げていきたい。

注

- 1 マイクロクレジットは、無担保小規模ローンとも呼ばれ、多くの NGO 等が手掛けるプロジェクトである。NGO 等の支援組織が無担保で小額の資金を貸付け、貸付けを受けた支援対象者は資金を元手として商売などを行い、売上金の中から返済するというしくみである。マイクロクレジットによる貧困層の自立支援への貢献が評価され、2006 年には、グラミン銀行とグラミン銀行代表のモハマド・ユヌス氏が、ノーベル平和賞を受賞した。マイクロクレジットについては、社会構造へ与えた影響の分析も行われると同時に、様々な課題も指摘されている（藤田 2005、高田 2006 他）。
- 2 ノクシ・カンタとは、重ねた布に刺し子で模様を縫いこんだ布である。もともと家庭の日用品等として使われる布であったカンタを NGO が商品化したもので、バングラデシュを代表する布の中でも、伝統的手芸品としての地位を確立している。
- 3 プッティングアウト・システムとは、生産工程を細かく分業し、その行程を仲介者がつなぐシステムである。「前資本主義的生産様式と資本主義的生産様式との間の中間段階を代表するもの」で、産業資本主義の発展における「原初的産業化」の段階とも言われている（ウォーターベリー 1995）。ウォーターベリーによると、プッティングアウト・システムでは、企業家が、原料あるいは半加工品の供給の管理と、完成品の市場売上の管理を行う。
- 4 本論は 2002 年 9 月～2004 年 3 月のバングラデシュでの現地調査による資料に基づいて議論を進める。本論中に登場する人物の個人名は全て仮名である。年齢については、2003 年当時のものを記載している。
- 5 サリーは、一枚の布で、身体に巻くようにして着る衣服である。現在では、南アジアの女性の衣服として知られている。
- 6 「ダカイ」とはベンガル語「ダッカの」の意である。
- 7 2004 年当時、1 タカ＝約 2.2 円。
- 8 タンティという語は、貧しさのために常に機織り機の前で作業をしたり、そのために教育を受ける機会を逸してしまったりという状況を連想させるため、ジャムダニの織り手たちの中には、タンティではなくカリゴル（*karghor*: 職人・技術者）と表されることを好む傾向がある。その反面、ジャムダニを織る村落内では、単に織りを担当する者という意味で、タンティという語は頻繁に使われている。

- 9 例えば、大規模 NGO、BRAC (Bangladesh Rural Advancement Committee) の、手工芸部門アーロン (Aarong) は、恵まれない職人 (underprivileged artisans) の支援のために設立され、国内外の市場の開拓や、手工芸品の公平な価格の確保のため仲介者 (middleman) をさけた生産者との直接取引等を目指している。また、Kumudini Handicraft は、品質を保ちつつ、職人 (artisans) へ経済的支援、訓練、市場の支援を行なうことを活動の一つに挙げている (パンフレット “Textile of Bangladesh Jamdani forum “より、筆者訳)。
- 10 バングラデシュの識字率は調査・統計を行う機関によって若干の開きがある。本論文では、52.5%とした。(2008年 Human Development Report、外務省 HP (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/kankei.html>))
- 11 K村のバザールでは、500タカで、7-8名が一週間、食べられる程度の食糧を購入できる。
- 12 ラフマンとシャミンは、同じバりに住む叔父と甥の関係にある。
- 13 K村のグラム・ショルカリのメンバー3名のうち、モジブルを含める2名がジャムダニのマハジャンである。
- 14 パルダともいわれる。南アジアに見られる女性の社会的隔離。

参考文献

五十嵐理奈

- 2001 「カンタからノクシ・カンタへ」福岡アジア美術館編『ベンガルの刺繍カンターその過去と現在』
- 2002 「開発援助 NGO によるパッケージ型商品生産—バングラデシュにおける刺繍布製品ノクシ・カンタの誕生—」東京女子大学社会学会紀要『経済と社会』第30号
- 2004 (2003) 「女性の技術が支える NGO アート—カンタとノクシ・カンター—」大橋正明、村山真弓編著『バングラデシュを知るための60章』明石書店

ウォーターベリー,ロナルド

- 1995「旅行者のための刺繍—メキシコ・オアハカにおける現代のプティ
ングアウトシステム—」アネット・B・ワイナー、ジェーン・シュ
ナイダー編『布と人間』佐野敏行訳ドメス出版
- 白田雅之・佐藤宏・谷口晋吉編
- 1999（1993）『もっと知りたいバングラデシュ』弘文堂
- 大橋正明、村山真弓 編著
- 2004（2003）『バングラデシュを知るための60章』明石書店
- 岡田菜穂子
- 2005「バングラデシュにおける開発援助と伝統工芸」『アジア社会文化研
究』第6号
- 佐藤寛編
- 1998『経済協力シリーズ 183「開発援助とバングラデシュ」』アジア経済
研究所
- 下沢嶽
- 1998「バングラデシュのNGOの現状」佐藤寛編『経済協力シリーズ 183
「開発援助とバングラデシュ」』アジア経済研究所
- 高田峰夫
- 2006『バングラデシュ民衆社会のムスリム意識の変動 デシュとイスラ
ム』明石書店
- 外川昌彦
- 1999〔1993〕「三 人々の生活とイスラム—人類学者原忠彦教授のフィー
ルドワークから—」『もっと知りたいバングラデシュ』弘文堂
- 那須久代
- 1998「ダッカ・モスリン—細い糸の布—」『遡河』第9号 遡河編集部発行
- 原忠彦
- 1996「東パキスタン・チッタゴン地区モスLEM村落における職業と価値観」
『東南アジア研究』7巻1号
- 藤田幸一
- 2005『バングラデシュ 農村開発のなかの階層変動 貧困削減のための基

- 礎研究』京都大学学術出版会
向井史郎
2003 『バングラデシュの発展と地域開発 地域研究者の提言』明石書店
Bangladesh Rural Advancement Committee
1981 “Jamdani—Figured Muslins of Dhaka—” BRAK Printers
Ghuznavi ,Sayyada R
1981 “NAKSHA A Collection of Designs of Bangladesh” ,
Bangladesh Small and Cottage Industries Corporation
Fazlul Bari
1983 ‘Jamdani Legacy Being Lost?’ Serajul Islam Choudury ed. “Today
vol1 Issue6 Take7” Today publidation
HARA Tadahiko
1991 “PARIBAR AND KINSHIP IN A MOSLEM RURAL VILLAGE IN
EAST PAKISTAN” STUDY OF LANGUAGES AND CULTURES
OF ASIA & AFFRICA, MONOGRAPH SERIES NO 25
Henry Glassie
2000 “Traditional Art of Dhaka” Bangla Academy Dhaka
Lynton, Linda
1995 “THE SARI styles~patterns~history~techniques”
London, Thames and Hudson Ltd
Mahamuda Degan
1991 ‘Jamdani silpa’ “Silpakala” Bangladesh Silpakala Academy
Sayeedur, Mohammad
1993 *Jamdani* (ベンガル語) Dhaka : Bangla Academy